

「星空と路一上映室」トーク 林剛平×鈴尾啓太

開催日時：2017年2月25日 13:00-14:15

話し手：林剛平（歎藍社）、鈴尾啓太（映像編集者）

進行：北野央（せんだいメディアテーク）

北野：ご来場いただきありがとうございます。メディアテークの北野と申します。この「星空と路一上映室」の紹介をさせていただく前に、まずメディアテークでは2011年5月から行っている「3がつ11にちをわすれないためにセンター」（通称：わすれん！）について説明させていただきます。このわすれん！は、様々な立場の方々（専門家や、アーティスト、学生、一般で働いてる方など）が、震災にまつわる気になった事柄を好きなメディアで記録するというものです。そしてそのサポートするというのがセンターの趣旨になります。

それで、この活動が続けるなかで、参加者の方々の映像が集まってきた2012年3月に、「じゃあ、上映会をやろう！」となりました。編集途中のものや、素材のままだったりするもの、あるいは、参加者のなかには表現者や映像作家の方々もいらっしゃるのですが、そういう方々の完成された映像作品まで、幅広い範囲の記録映像を上映しようと、この「星空と路一上映室」を毎年行っています。

それでこれから、（本日の上映室でみなさんに映像を見ていただいた）林剛平さんと、映像編集者の鈴尾啓太さんと一緒にアフタートークを行っていきたいと思います。

先程上映させていただいた林さんの映像は、飯舘村での調査を記録した『5年後の飯舘村調査』でしたが、本日の午前中には山形の小国の方での熊猟の様子をまとめられた『小国春熊猟2016』を上映しました。

また明日の午前にも、別の映像『さぐば』が上映される予定です。名取市の閑上という沿岸部で、震災以後「さぐば」と呼ばれる木の小船（釣りをしたり、作業する船）を復活させるために動かれている人たちがいるのですが、その唯一南三陸にいらっしゃる船大工さんの作業様子を記録したものになります。

剛平さんは、2011年からわすれん！に参加されているわけではなく、昨年からの映像記録を撮られています。まずは林さんに自己紹介と、本日実際にシアターで自身の作品が映されたのを見られた感想を伺ってもよろしいでしょうか。

林：林剛平と申します。今見ていただいた『5年後の飯舘村調査』は、午前中に上映した『小国春熊猟』の小国に初めてカメラを持って行った一週間前に、まずカメラを使い慣れてみようとして撮ったものです。わすれん！に登録した翌週くらいに撮った映像だったかと思います。

飯舘の調査は2011年から参加しているのですが、6回もやっていると段々異様な風景なはずのものにも見慣れてきてしまっていて。あんまり良いものでもないのに、調査から帰ってきて人に話すこともあまりないんです。自分でも思い返す機会がなかったので、映像を撮って編集すれば、人にも届けることができ、自分でもそこから何かを探せるのではないかと思い始めました。

北野：そうした経緯で初めてカメラを持たれて、お仕事として放射線の調査を飯舘村でされるというわけですね。後ほどもう少し詳しく伺えればと思いますが、先にもう一方、本日の登壇者である鈴尾啓太さんをご紹介します。

鈴尾さんも2011年から東京の方で映像編集のお仕事をされながら、お休みの時に今も東北の方に通われて、宮城だけでなく、福島、岩手の沿岸部で『沿岸部の風景』という映像で撮ってこられました。

2011年から2014年まで、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」で行われていた「こえシネマ」というわすれん！参加者の映像見て語り合うイベントや、この「星空と路」で継続的に映像を上映させていただいております。また、2013年の山形国際ドキュメンタリー映画祭では、震災の映像部門の「ともにあるCinema with Us 2013」でも『沿岸部の風景』がノミネートされ、現在はメディアテーク2階の映像ライブラリーでもDVDを借りられるようになっています。

現在は、森達也監督の『FAKE』という映像の編集や、テレビのドキュメンタリー編集などのお仕事をされているのですが、本日はその編集の経験などを踏まえたエピソードを伺いつつ、林さんの映像についても皆さんにお話しをふりながら進めていきたいと思います。

では、鈴尾さんにも自己紹介と、林さんの『5年後の飯舘村調査』を観られての率直な感想や、気になったシーンなどを伺えますか。

鈴尾：鈴尾と申します。普段は東京で映像や映画やテレビの編集を中心にしています。わすれん！には、2011年の夏頃に知人の紹介で参加させてもらい、休みの度に被災地に行って撮ってきたものを、編集途中の段階で見てもらったり、上映させていただいたりしてきました。そういう意味でわすれん！は、僕が東北の震災や原発事故のことなどを考える上での中間地点のような、考えるきっかけを与えてもらった場所になります。

今日見た感想は、他の映像をちゃんと見たのは今日初めてだったんですけど。印象に残っているのはガラス越しにこう、表みたいなのを指さしているところで、奥でインタビューされている人がしゃべっていて、手前後ろからこう、これ、一年目だよねとか言っていたり、ああいうのがすごい僕なんかは面白いと思っちゃうというか。人と人のやり取りとか、僕は普段の心理だと撮らなかったり、編集で落としてしまうようなところも使っていて、逆に新鮮だなど。車内からの風景もずっと見ていると、ここは放射能があって危険な場所なんだろうけど、美しく見えてくるというか。調査しているのですが、この人たちの緩い雰囲気は何でしょうね。情報として与えられるものとはまた違う面白さがあったかなと思いました。

林：この調査っていうのは、もう6年もやっているとだんだんこれ一つでは報告書にならなくなってきて。数年分でもまあA4、2、3枚の報告書になるんですけど。でも、もっとあるよなあという、見え帰ってきた時の感想として。そういうのを人に伝えるのは本来であれば研究の面で行っていきたくてというものがあるのだろうけど、ちょっと僕には、それはとても遠くて。映像やいくつかの方法を試しながらっていうのをわすれん！の人に協力してもらってやっています。

北野：多分、多くの方が、一般的なドキュメンタリーというのは、ナレーションが入っていたり、字幕で説明が入っていたりすることが多いと思われると思うのですが。今回見ていただいた方も、少し教えて欲しいというところがありましたら、この時間にあの映像のあのシーンが気になっている、というのをちょっとほぐしながら聞いていきたいなと思うのですが。前半は、でも面白いのは多分、論文で数値とその言葉で出されているので、良いか悪いか、もしくは専門的な範囲での結果は知っていると思うのですが、その内容というのはやはり意図的に映像では入れないようにしているのでしょうか。映像は、論文とは違うメディアとしてやっぱ残していったり記録していきたいなという感じなのですか。

林：まず技術があまりないので、最初はどこを走っているか地図上の情報入れて、行った後の放射能の数字をそこにプロットしていくようなことも考えたんですけど、そういう動画を作るのもなんか聞くと結構大変そうだし。あと、その努力をしてまでなのかな、と途中でやめたんですよね。

鈴尾：この映像を見ていて、飯館のどこなのだろうとか、この人たち誰なんだろうとか、思うじゃないですか。それが、僕にとっては逆に良かったんですけどね。結局、映像がその情報として、そういう作り方もあると思うんです。だけど、フラストレーションにならないギリギリの面白さがあったのかなと。地名を出すとやっぱり失われるものがあるなあとは思っていて。これはかなり難しいことだと思うのですが、自分の震災映像を編集していく時に、地名と何年何月というのをどこまで出すかということは、やっぱりすごく考えるんですよね。だから、撮る人がそれぞれ悩むところだろうなとは思いました。

北野：飯館村も放射能の被害というのは地区や集落によってもバラバラなんですよ。そういった意味で、その地名を出すことで、被害の状況の科学的もしくは数値的な違いというのを証明できるかもしれないんですけど、逆に地図を見ていて細かい集落名を出されても知らない人には知らないままにもなるのかなと思いました。逆に、どこを走っているのか分からないけれど、ただひたすら黒い袋の山が永遠に続くという映像を見て、どこまで続くんだろうっていう怖さもあったんです。それはやっぱり飯館村の中でも違いというのはあるんですよね、被害とか状況とか、その・・・。

林：そうですね。南の方が汚染も酷くて。飯館村は今、結構歴史的な時期といえますか、次の4月に帰村宣言が出るというので大きい転換点にあるんです。一番南の集落の長泥地区だけを残して、あと一か月くらいで解除になるんですけども、そこにはまだああいうものが山積みにしてあって。仮設と言いながらも、かなり立派な焼却施設を何百億とかけてつくって。飯館だけでも二つも仮設の焼却炉が出来ているし、原発から30km圏内の12市町村全てに、その数百億円規模の仮設焼却炉が今つくられているこの状況があるんです。除染というのに膨大な税金をつぎ込んでいる、そのつぎ込み方というのが、一つ前の映像での小国に雪がいっぱいある雪景色と、この飯館にフレコンパックがいっぱいあるというのは、撮った時期も一週違いだったりしたので、すごく何か白いのと黒いのがいっぱいある印象的な光景だったんです。

北野：小国の熊猟も元々、熊の放射能測定を依頼されて。そこで知り合ったのが、撮ることへのきっかけだったようですが。

鈴尾：今、聞くと、やはり伝えたいことがあるように感じるんですけど、それを映像内で出すとは思わなかったのですか？これは出した方が良くとか、出さない方が良くっていうことではなくて。

林：例えば、飯館の映像はパソコンでメモをしながら、あまり見ないで撮っていたりもして。だからもう少し、ブレないできちんと撮ったほうが伝わるなあとは後で思いました。

鈴尾：例えば今、飯館はこういう状況で、長泥が酷い状況だということを、例えば色んな方法あると思うんですよね。それが正しいとかでなく、例えばテロップで出すとか、ナレーションでとか、来場者に紙で配るだとか。そういうことを伝達する選択肢は他になかったのでしょうか。

林：もう少し自分で見てみたいという段階なのかもしれないです。京都に震災の時に住んでいて、飯館に行って帰ってきた時、飯館で会った人が京都に遊びに来てくれたことがあったんです。その時に、僕が飯館の土のサンプルをいくつか持っていて、部屋に置いていたんですよ。僕からすると、その汚染された土壌というのは遠くに置きたいものなんだけれども、「これ、飯館のサンプルなんです」と言ったら、その人がすごく愛おしそうに段ボール箱を抱え、まあ、抱えはしなかったですけど、こんな感じの仕草で。あのような福島や東北にある土への愛着というのは、都会で育った自分には分からなくて。何か汚染物みたいな感じになってしまっているというのを、まず言いたくなくて。だからその、飯館村とか、どこどこの何がっていうのよりは、まず都会で育った人の感覚と飯館の人の感覚の違いみたいなのが大きくあるなあというのを伝えたいと思っています。

北野：どうですか、会場の皆さんの中でも何か、今回の飯館村の調査の映像で気になったとか、このシーンはどういう意味なんだろうとかありませんか？僕も、そもそも調査というのは、どういうことなんだろうと気になるんですけども。何か気になったシーンとかある方はいらっしゃいますか？

A：多分何かを伝えたいとか、はっきりしたものがまだ固まっていないような感じに受け取ったのですが、これからまた撮り続ける可能性もある中で、これから何を撮られるおつもりですか？例えばテレビでは、いろいろなドキュメンタリーが出ていますけども、テレビでは出せないようなものを撮るとか。

それとも事故の記録を？今までだと事故の記録みたいな、事故の移り変わりの記録を見ているように感じたんですね、あの映画を見て。これからもそのような事故の記録と言いますか、自分のアイデンティティが福島に没入していく、そういう感覚を描いていくのか。それとも、もう少しはっきりとした指針を持っていくのか。映画を見ていて、どのように捉えて良いのかが

分からなかったの。すごく引き付けられるんですけど、何を見ているのかな、という。自分自身どのように見て良いのかわからなかったの、見方をちょっと教えていただけたら。

北野：いくつかあったと思うんですけど、前提としてちょっと没入しているのかというのは、没入するというのはどういう意味ですか。没入して映像を撮っている感じでしょうか。

A：そうですね。何かを映すというよりも、自分を映している感じに見えたんですよね。何かを伝えたいから映すというのではなくて、映像を撮った人の記録というんですか。それを見ている感じだったんですよね。なにかドキュメンタリーというか、そういうものを見ているような感じがして。私の考えが、当たっているかどうかは分かりませんが、そういう感じで撮り続けるのかどうか、そういうところを教えていただければ。

林：何か伝えたいことというか、言いたいことはすごくあって。実家が弁当屋なんですけど、食べ物をあまり捨てたことがなくて。福島調査が2011年から始まってから、農家の方から産物が送られてくるのを測定して測定後に捨てるということをやっていた時に、その年の夏野菜がどんどん送られてくるんですけど。

初めて行った福島で、桜が満開の下に雪があるような、雪景色の中にある桜とか、初めて見た東北の美しい景色なんですけど、綺麗さと汚染物みたいなのがダブって見えて、これはまずいなと思ったんですよね。それでその時、自分でここを繋げなければ日常にはなかなか戻れないなと思って。

こういう世の中になったら良いなという正しいことというのは、正しくない状況に対して萎縮させるので、そうではなく何かを作りながらその過程で。一つ前の熊の山歩きの話なんかは、道中歩いているのが大変なんだけど皆で飯を食べて嬉しいみたいな。あのような東北の共同体の力みたいなのを体感していきたいんですよね。そういうことをしながら、今の状況としては先が見通せないところを移動しながら見通していきたい、というようなことも。

それで、映像で何をどこにやりたいかっていうのは分からないですね。一年やってみようと思ったので、今回は3つ出してますけど。たぶん、このような風に撮るとするのはたぶん今回だけだと思います。

北野：初めて撮られたということで、特に飯館村の映像は、先ほど話していたように4、5年ほど調査し続けてこられたなかで、そこに行くことや放射能の数値を読み上げることも結構事務的で、驚きもないような気がしたのですが、その調査も続いているということで、少し語弊があるかもしれないですけど、緊張感がない中で調査しているような気がしました。

鈴尾：それが、面白かったですけど。どうしても、きつい言い方になっちゃうじゃないですか。こういう現状なんだという実際の現場というのは、繰り返すことによって過激な、こんなに酷い状況なんだという。きつい場面もあるでしょうけど、実際の最前線のところでは、「まああのんびりやる日もあるさ」というか。その感じが見られたのは、あの場に居れない僕としては面白かったなとは思いますが。

北野：（鈴尾さんが映像編集をされている）『FAKE』の映像は監督が撮られてますよね？ あの主演の方の淡々とした映像を、部屋の中でずっと撮っていらっしやるではないですか。今回のようにそこに飽きがあったか緊張感があったか、ちょっと僕は分からないですけども、映像としては同じ主演の方と、パートナーの方と、あと同じマンションの中の一室がずっと続くと思うので、そういう中で今指摘があった没入している感じが繰り返されている感じや、それを素材映像で編集する際に気を付けられたことなどはありますか。メシ食ってるとか、豆乳が好きだとか、そういう暮らしの個人的な趣味などは、目に付くような編集・映像でもあった気がするんですけど。

鈴尾：そうですね。どうなんでしょうね…。没入は悪いことではないと思うんですけど、『FAKE』は、まず佐村河内さんという強烈な人がいましたし、森達也さんという強烈なディレクターが居ましたから。でも、いくつもレイヤーはあったんです。あのゴーストライター問題というレイヤーと、耳が聞こえるのか聞こえないのか、どこを嘘言っているのか。それで結局、音楽は作れんのかどうか、どんな暮らしをしているのか、とか。そんないくつもレイヤーがあるのを、いかに整理し過ぎず、最終的にエンターテインメントにするのかということに心掛けたんです。めちゃめちゃ大変でしたけど。整理し過ぎないということはやっぱり心掛けましたかね。

北野：まあ、監督自身あまり、森さん自身あんまり質問とかされなかったんですよ。

鈴尾：ええ。

北野：そういうのがずっと続く中であまり整理し過ぎると、なんか……。

鈴尾：そうですね、だから、そうなんですよ。

北野：真実を映すかどうかとか、偽物、嘘なのか何なのか、という情報だけにしないようにしている。

鈴尾：そうですね、あとは単純に映像を整理しないということも含めですけど、結構その、今日の映像を見ていても、僕だったらここを切ってしまうみたいな所が、かえって良かったりするんですよ。

北野：どこらへんですか？例えば。

鈴尾：んー、車の天井撮っていたりするところとか（笑）。あとは同じカットでも、その、カットの頭とおしりの使い方とか。それは僕の整理であって林さんの整理でもあるし、むしろ、この後に神社に行くんだっていう（笑）。整理されてない感じがやっぱ面白かったです。もう少しやり様があるのかもしれないですけど、これは本当に情報伝えるだけの作品になってしまうと、勿体ないなという気はしましたけど。

北野：他にご来場されている方で気になったシーンとか聞いてみたいことがある方いらっしゃいますか。

C：淡々と描かれている中に、結構色々な情報があったと思いました。それは、時間の経過を追っていたということもあるし、対象に対する寄り添う姿勢ですね。人であるとか熊であるとか。あと、原発であればフレコンとか、空き家の家であるとか、不在の人であるとか。そういうところに視点が向けられているというのは、淡々としているけれども、色々な情報を持っていて、見る人に気づかせてくれるところがあったと思います。例えば、あれを写真で一コマコマ撮ったとします。写真だと一瞬、強く印象づけるものはあるかもしれないけど、（映像だと）その熊を仕留めるためにどれだけの時間がかかったとか、そういう長さを想像できると思うんです。もちろん編集によってだいぶカットされていると思うんですけどもね。それから、猟師の人たちが最大のご褒美である熊を食べるというシーンも、その前に放射線の測定があったんだという一言がありましたよね。それだけで、あの小国までもやはり汚染が広がっているのだと。それで、きのこはどうだったろうなってちょっと心配をするぐらいに、結構情報が溢れているなど。定点観測的にフィルムを回したような、そういうところがとても好感を持って観させていただきました。

それと、飯館村に関しては、やはりマスメディアの報道などでは触れていないところがありますよね。それから自治体や国の発表も、全然一般庶民には伝わってこない。そういう意味では、あのような30分くらいの映像の中に、こちらが知りたい現実みたいなものがちゃんとストレートに伝わっていたのが、とても良かったと思います。今後も、同じ方法でも良いのではないかなとも思うんですけどね、私は。とても良い映像だったと思います。

林：ありがとうございます。僕、目が悪くて、あんまり調査の最中とか景色見えても見えてないんですよ。それは小国に行ってもなんでけど。近眼ですね。だから、自分で撮ったのを帰ってきて見て、初めて見えることとかがあるので。やはりそれはカメラの力だと思います。

北野：それが記録している時と編集している時で、目線を変えていることになっているのかもしれないですね。編集の時も新鮮な目線で素材を見て。

林：飯館はほとんど1日、朝から夕方まで8時間ぐらいなんですけども。かなり回しっぱなしだったので、むちゃくちゃ長いんですよね。

鈴尾：何を基準に編集されたとかあるのですか？その8時間の映像を30分にするにあたって。

林：まず2時間ぐらいまでガーッと減らして、そこから30分ずつ。

鈴尾：それは要約するような感じですか。ここ良いなみたいな。

林：いや、時系列をずらしているわけではなく、順番通りに並べているので、シーン丸ごと落とすか、何秒か残すかぐらいですね。

鈴尾：丸ごと落としたシーンも。

林：いっぱいあります。やり方が分からなかったのもう魚をさばくのと同じようなノリで。いつか上手くなるだろうみたいな。なるべく触らないでぱっと、と思ってやりました。

鈴尾：(笑)

北野：今後林さんが、編集を進めていくうえで、例えば没入しているとか何を伝えるとか、分からない部分とか、あと情報が良いのか悪いのかということや、色んな情報を付与していきける可能性というのは、これからもあると思うのです。ただ鈴尾さんがおっしゃっていた整理していないことの良さは残しつつというのは、例えば鈴尾さんが林さんの飯館の映像を編集されるとしたら、どのような軸や観点置きながら進められると思いますか？

鈴尾：偉そうに言うと、僕はこのまま突き進めば良いと思います。ただ、例えば僕だったらで言うと、一つの目線を作るっていうことでしょうか。編集者として素材を与えられた時に、僕は現場にも行っていないので、一つの目線を作るっていう。

北野：それは編集する目線というか、ディレクションとして、あるいはカメラが見ている視線というか。どういうことなのでしょう？

鈴尾：うーん、色々混ざってはいるのですが、カメラの目線でもあり、編集、撮影者、監督の目線でもあり、編集者の目線でもあり、観客とか視聴者の目線でもあると思うんですけど。でも、ある一つの目線が、何かとイコールでなくても良いんです。新たにつくっても。撮影時のものでなくても。監督が事前に持っていたテーマでなくても良いかもしれない。それが一つあれば、いくらでも自由に尾ひれをつけたり、排除したりという方が僕はしやすいという感じですか。

北野：それは何を伝えたいか、メッセージという部分の指摘もあったかと思うんですけど、その時の目線って、テレビだと結構イコールにされやすいと思うんですけど、映像の目線と。伝えたいメッセージはイコールで結ばれていて。ただ、ドキュメンタリー映画の場合、少しズレて編集されているものが多いと思うのですが、その時に伝えたいこととメッセージと、その目線というのはどういう距離感と思って良いのでしょうか。2つの軸を折り曲げながらさばっていく良いんですか。

鈴尾：どうですかね。テレビは、分からないとダメというのが基本にありますから。分かる前提で伝えるということですよ。緩やかな時間であっても、それを意味として伝えるという。映画はもう少し観客を信用していると言いますか。時間だったり、作業だったり、それこそ観客の目線というのを重要視できるので、そこは大きく違うのかなと思いますけど。

北野：観ている人を信頼していたり、もしくは分からなさが残っていても・・・。

鈴尾：分からなさと言うと、ちょっと良くないと思うのですが、100伝えたい時に100を提示する必要はないということですよ。それは20であった時の方が、120になったりする可能性があるという。本当の会話でも面白いところだと思うのですけども。もう少し自由に映画とかだとできるのではないかなと思うんです。

北野：なるほど。その他に何か質問とか感想とかある方。

D：基本的なことなのですが、その飯館村で行われている調査というものはどういうものなのか、概要でも良いので教えていただきたいのですが。

林：車の中からなのですが、道路上で放射能の測定をしています。村が直径10kmぐらいの円形の村なのですが、その中を100kmくらい走りながら160~200地点の空間線量率を車内で測っています。車内と車外では、遮蔽率が4割落ちぐらいなので。その後、その村全体の汚染の状況を表した、色塗りされている地図がありますよね。あれを作るための調査です。これは毎年やっているのですが、この調査の結果から、その放射能の物理的な減衰であったり、除染による効果というのが見えてきます。

北野：車外でも数カ所測定されていて。その基準値を見ながら、車内での相対的な数値をかけたりにして。できるだけ多くの箇所というか、全体を測定しないといけないので、そういう風にやっているそうです。

林：外に出ているシーンで、土の30cmのコアを抜いていたシーンがあったと思うんですけど、あれはあの定点が5カ所くらいあって土の深度分布が分かるというものです。本当はいっぱいやりたいんですけど、時間もかかるので数を少なくしてその分、網羅的な調査を車の中でやっています。

北野：事実として、この5年で飯館村の放射線量は低くなってますか。

林：半減期に従って減っているというもので、そんなに除染の効果は見られていないと。

北野：科学的に半減期は分かっているけど。

林：結構、理論曲線に乗るんですよ。

北野：そういう意味で科学はすごいですね。
最後に少し時間があるので、鈴尾さん、林さんから一言ずつ何かコメントや感想などいただけますか。

鈴尾：今日はありがとうございました。今日の夜に、僕の映像も上映してもらえるんですね。6時か7時ぐらいから、『沿岸部の風景』というのをやるので良かったら観に来てください。

北野：5時20分から上映いたします。本来は2時間ほどある映像なのですが、今回は岩手県の大槌町と陸前高田の映像を30分ほどにまとめたものを流します。その中でも、その一人ずつの復旧復興の作業—例えば花壇を造るとか、瓦礫を取るというような片づけの作業を丁寧に撮りながら、作業している言葉を紡いでいるような映像になります。

鈴尾：この短いバージョンを見ていないのでちょっと楽しみにしています。

北野：では林さんもお願いしてもよろしいですか。

林：何を描きたいかということと関係あるのですが、まだモヤモヤとしか分からないような出来事を、今回は3つ、「小国の熊猟」と「海辺の船造り」と「飯館の調査」で結構極端な3点を飛ばしているつもりでいて。東北の震災後に何が起きたかというので、今残さないといけないことはいっぱいあると思うのですが、この3つは方向性が違って。なるべくそこから遠く離れたことを囲いながらでないと、その間のことも言えないのではないかという気があるので。自分でそのような興味を持った場所に行って、何年か掛けてというのをこれからもやってみようと思います。先ほど鈴尾さんがおっしゃっていた、20が120になるというマジックを何とか身につけようとしていますので、ぜひよろしくお願いします。

北野：ありがとうございます。飯館村の映像は、結構淡々と調査記録を車載で撮ってる映像だったんですけど、熊猟の方は本当に冬の山形の山の中に入って、またぎの猟師さんたちと本当に駆け登っている中で、その環境や文化がどういうものが撮られているものになります。明日の10時半から上映する『さぐば』は、南三陸の大工さんの作業や、（木造の造船をつくられる作業なので）その接合の仕方やその所作、作り方のようなものを丁寧に撮られています。これも淡々とした記録映像に近いものだと思いますが、是非も観ていただければと思います。この後、お二人には残っていただけるので、シアターの外でまだ訊き足りないことがあれば訊いていただければと思います。では、時間になりましたので、アフタートークは以上になります。ありがとうございました。